

特集にあたって

山本 吉宣 (東京大学)

計量的・数理的な分析は、1950年代の「行動科学革命」によって、政治学、社会学など社会科学の広範な分野に導入された。そして、計量的な分析においては、統計学自体が大きく進歩することによって、いまや洗練された多変量解析、時系列分析などが多く使われるようになった。また、数理的な分析のなかでも行為者を効用最大化をめざした合理的行為者とみなし、それらの間の戦略的な関係を考えるゲームの理論は、社会科学のなかに広く取り入れられ、ゲームの理論そのものの発展もあり、社会的な制度を分析する1つの重要な方法となっている。数理的な方法にはゲームの理論以外にもカタストロフィーとかカオスの理論などがあり、社会科学に広く応用されている (Rapoport, 1983; Kiel and Elliot, 1996)。また、近年では複雑性の理論とか (社会) 進化の理論という新しい考え方が導入され、社会科学でいくつかの数量的な分析が行われている (Axelrod, 1997; Cederman 1997)。そして、そのなかでもっとも有力な方法がシミュレーションである。

このように社会科学における計量的・数理的分析は多様なものである。が、社会科学の側から見て重要なことは、社会科学自体の重要なまた具体的な問題に対していかに計量的、数理的な分析が応用でき、その問題を明らかにすることができるか、ということである。本特集は、このような視点から、政治学、国際政治学、社会学・社会心理学の分野における計量的・数理的な分析を紹介しようとするものである。本特集は5つの論文から構成されており、最初の2つの論文は国内政治の分析に関わるものである。「選挙・世論の数量分析」(田中愛治)は、無党派層の内容と行動を明らかにするためにいかに世論調査のデータが使われたか分析されているかを検討している。「政治制度の数理分析」(石田淳)は、有権者、政党をともに合理的な行為者としたモデルを考え二党制のもとでの政策の均衡

点と二党制そのものが均衡した制度である条件を明らかにしている。次の2つは国際政治における計量的・数理的な分析を取り扱っており、「国際政治の数量分析」(原田至郎)は、戦争の発生と終結に関して、データをもとにした分析と合理的行為者をベースとしたモデルを紹介している。「国際政治の数理分析」(山本吉宣)は、原田論文を受けて戦争の原因に関するゲーム論的なモデルを取り扱っている。最後の「社会秩序のシミュレーション」(高木英至)は、社会学・社会心理学において近年盛んになっている、複数の主体 (エージェント) を措定し、それらが従う行動のルールからいかなる社会が形成されるかを明らかにしようとするさまざまなシミュレーション・モデルを比較・検討している。

以上、きわめて限られた問題を取り上げたに過ぎないが、最近の社会科学における計量的・数理的な研究の一端をご理解いただけたらと思う。

Axelrod, Robert (1997) *The Complexity of Cooperation*. Princeton: Princeton University Press.

Cederman, Lars-Erik (1997) *Emergent Actors in World Politics*. Princeton: Princeton University Press.

Kiel, L. Douglas and Euel Elliot, ed., (1996) *Chaos Theory in the Social Sciences*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Rapoport, Anatol (1983) *Mathematical Models in the Social and Behavioral Sciences*. New York: John Wiley.